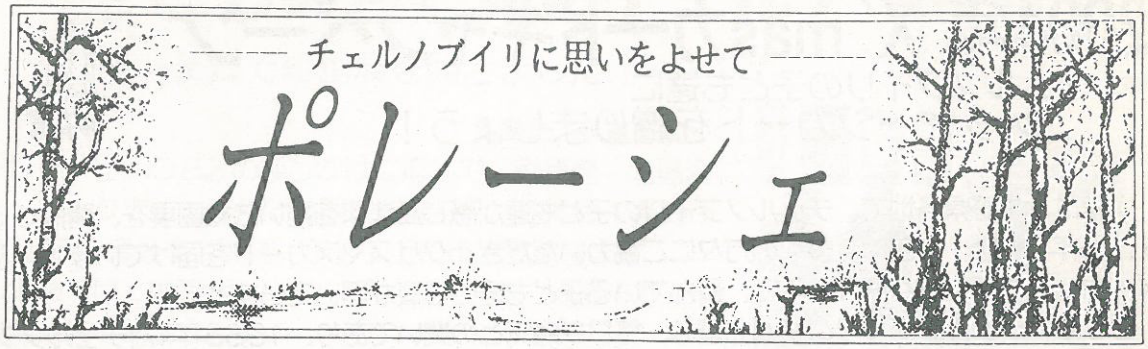
NO.83.2004.9.30.



ウクライナ国 **初！** ジトーミル州 **発！**

"健康保険制度が誕生"

健康な人が病人を支える「健康保険制度」が、ウクライナ国で初めて誕生した。

ジトーミル州で始まったこの制度は、他州にも広がり始めているという。発足から４年、州内の加入者は、既に15万6,000人（州人口の11.2%）に達している。この制度を発案したのは、ジトーミル州のパラモーノフ保健局長で、私達「チェルノブイリ救援・中部」にとっても、お馴染みの人物である。

1991年に初来日した、ジトーミル州立小児病院小児科（当時）のアルチュフ医師が、実務に当たっている。加入費用は、大人が毎月６グリヴナ（約126円）、子どもが３グリヴナである。加入すれば、一部の高価な医薬品を除き、治療費や手術代が無料になる。

この制度は、全ての公立病院や診療所で利用でき、私たちが今回訪問した移住者の村診療所や、医薬品を届けたナロジチ病院・ブルシーロフ病院でも、この制度への参加を呼びかけるステッカーに出会った。（写真参照）

現在私たちが行っている、事故処理作業者や障害者への医薬品支援も、この制度を利用すれば、現地の人々の自立を促し、被災者にとってもより高度な治療が受けられる可能性がある。制度の導入を働きかけてきた私達としても、さらに研究・提案をしていきたい。ちなみに、我が現地窓口のチェルノブイリ・ホステージ基金代表、V.キリチャンスキーさんも加入している。（河田）

〒466−0822 名古屋市昭和区楽園町137 1−10
チェルノブイリ救援・中部 代表：田中良明
郵便振替：00880−7−108610
TEL/FAX：052−836−1073（月・水・金 10:00〜17:00）
E−mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp
ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

2004年 X'masカードキャンペーン

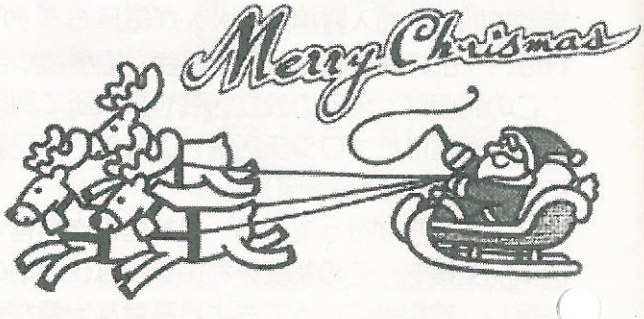
チェルノブイリの子ども達に メッセージカードを贈りましょう！

今年は、長野県各地で、チェルノブイリの子ども達が感じたままを描いた絵画展を、開催しています。毎年、救援・中部は、多くの方々にご協力いただき、クリスマスカードを届けています。温かいメッセージや折り紙が届けられて、喜んでいる子ども達の写真が届いています。

しかし、チェルノブイリの子ども達は、毎日が病気との闘いであり、1986年4月チェルノブイリ原子力発電所の爆発事故は、決して忘れてはならない事故だと思います。今回の絵画展の中でも、カード作りを行っています。何人か寄ると、思い思いのカードができました。きっと気持ちが伝わり、喜んでもらえると思います。

今まだ、10月になろうとしている時期ですが、発送までの手続きがたくさんあるので、まだまだ先のことと思わないでください。もし、クリスマスまでに届かなかったらがっかりするでしょう。年内に、カードやメッセージ・折り紙等を入れて、皆さんの気持ちをたくさんの子ども達に届けます。

1) 絵を描いたり、切り絵を貼った手作りカード・市販のカード・絵葉書などに、あなたのメッセージを書いてください。ロシア語・英語・日本語どれでもかまいません。
2) そのカードを封筒に入れ、封をしないで、さらにひとまわり大きい封筒で送ってください。
3) 皆様から送られてきた封筒に、事務局で1枚ずつ、ロシア語のメッセージスタンプを押し、折鶴などを入れます。
4) 集まったカードを航空便でウクライナに送ります。
5) 現地の救援団体「ホステージ基金」により、クリスマスと新年に合わせて、病院や孤児院の子ども達に届けられます。



今回、初めて長野県で事務手続きをしますので、カードは**12月10日(金)**までに送ってください。

＜絵画展で作成したカード＞

【送り先】
〒389-0806
長野県千曲市大字磯部819-5（下崎印刷所内）
脱原発北信濃ネットワーク　小林　修
TEL 026-275-0387　FAX 026-276-5817

【問合わせ】
〒466-0822
名古屋市昭和区楽園町137、楽園アパート1-10
NPO法人　チェルノブイリ救援・中部
TEL／FAX　052-836-1073
（月・水・金10時～17時）
ホームページ　http://www.debug.co.jp/ukraine/

「子どもの目で見たチェルノブイリ」

――長野で絵画展を開きました！――

長野市　本道多加子

ポレーシェNO.82の呼びかけに応じて、脱原発・北信濃ネットワークで約1ヶ月間絵画をお借りし、松本市・長野市（2箇所）・須坂市で開催、そして上田市でも開きます。

松本市では、映画「ヒバクシャ」上映会場、長野市では市内南部地区で開きました。

今、須坂市の「おはなしの森」（子どもの絵本館）で開催中。

長野市南部地区は、1998年冬季オリンピックの選手村があった、川中島町今井です。展示会場は、川中島有線放送のご協力により、同ギャラリーを9月13日（月曜日）から17日（金曜日）まで借りました。同じ敷地内に、支所・公民館・児童館の施設があり、人の集まる場所のため、期間中約200名の方が見てくれました。

来場者からは、「思ったより明るい色彩で救われる思い」「そこに生まれ、育ち、住んでいるだけで、苦しみを強いられるなんて…」「絵のメッセージはすごい」etc.の声。

児童館の子ども達が、先生に引率され、学年別に来場。絵から何かを感じて欲しく思い、説明しました。子どもの方から、美浜原発事故やイラク戦争のことを話しかけてきて、2年生とは思えないくらい社会に関心があると、こちらが感心しました。有線放送が、前の週から朝昼夜（勿論開催中も）、「お知らせ」で町内放送してくれた為か、朝から来場がありました。初日は、主催者へのインタビューと、「来場者の声」の番組放送。また、15日には、イベント「ゆうほうサロン」開催の協力もあり、その様子も番組放送。「ゆうほうサロン」では、チェル救運営委員の小牧崇さん（伊那市）をお呼びし、2月にウクライナへ行かれた時の「チェルノブイリ報告」を、プロジェクターを使用して、参加者30名に話していただきました。　州立小児病院・市立小児病院・ナロジチ地区病院などへ支援している医療器具、現地事務局を通しての様々な団体への支援、また、子ども達にクリスマスカードを手渡している写真などを見ながら、チェル救の活動を知ってもらうことが出来ました。有線放送のアナウンサーが、ポレーシェ81号の「息子に車椅子を贈られたお礼の手紙」を、ウクライナの民謡「バンドゥーラを手にとって」をバックに朗読し、雰囲気を盛り上げてくれました。

ボランティアも駆けつけ、ロシアティとロシア風ホットケーキを作ってくれ、ミニ食文化にも触れました。古切手・折り紙・切り絵などを使って、子ども達へ思いを馳せながら、「クリスマスカード」をみんなで作りました。

今年もミルクキャンペーン!!

クリスマスプレゼントのひとつにしてくださいませんか？

今年も、小児病院で病気と闘う子ども達や、孤児院で生活している子ども達に、**粉ミルク**を届けます。

あなたの"心からの協力"を待っています。

今池バザーのボランティアに参加して（後藤裕依）

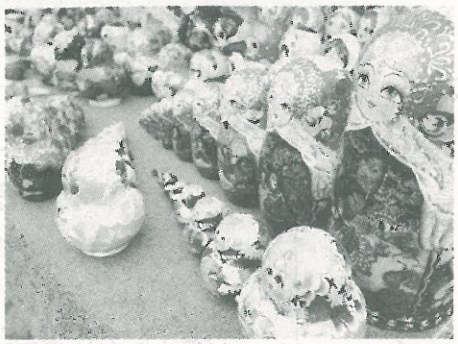
私にとって、今回のボランティアは、自分からやろうと思った初めての体験でした。名古屋 NGO センターからボランティア募集のメールが届いたので、今までボランティアをやったことがなかった私は「やってみよう！」と思い、電話しました。救援・中部について何も知らなかったのですが、とりあえず行ってみようと考えました。何をやるのかも、正直言って、始めはあまり把握していませんでした。

私は、準備会とバザー１日目に参加しました。準備会（バザー品の値札付け作業）は、値札付けよりも、チェル救のスタッフさんとの出会いのほうが印象に残っています。先ほども述べましたが、“チェルノブイリ”について、さらに“チェル救”についても、知識がなかったので、まず私は、チェル救の活動について知りたかったのです。尋ねてみたところ、みんなとても親切に「どうして設立されたのか」「どんな活動を行っているのか」「今回のバザーの目的」などさまざまなことを教えてくださいました。

バザー当日は天気がよく、「屋外でのバザーだから暑いだろうなぁ」と思っていたのですが、軒があり日陰だったため、それほど暑さを感じることなくできました。バザーが始まり、いざ品物を売るとなると、私は声を出してお客さんに話しかけることができませんでした。ほかの方々は慣れているかのように、沢山のものを売り出していきました。「今日は、結局何も役に立てずに終わってしまうのかなぁ…」とぼんやり感じていたのですが、それでは何のために来たのかわからないと思い、午後からは、少しお客さんと会話をすることができるようになりました。フェアートレードの品物も一緒に売っていたのですが、お客さんが「これぐらいなら100円均一で買えるから、高いわよ。安くしてちょうだい。」と言われたので、フェアートレードの説明を少ししたのですが、「今のこの不況の時代に、フェアートレードの品物と言われても、それを理解して、ある程度寄付みたいな形で買う人なんか、あんまりいないんじゃない？」と言われ、日本人の多数の意見を聞いた気がしました。「もっと理解が広まるといいなぁ…」と、そう思うことができたのも、このボランティアに参加したからこそでした。

参加してみて、とてもやりがいのあるボランティアだったと思います。というよりも、“ボランティアをしてるんだ”と、意識せずにできたのは、大事なことだと思います。ボランティアというと、「やってあげる」という感じが、どうしてもあります。しかし、今回そう思うことなくできたということは、「ボランティアを通じて、自分も何かを得ることができた」ということになります。ボランティアとは、一方的なものではなく、相互的に何か返ってくるのだと、私はそう思いました。本当に貴重な体験をさせていただいて、ありがとうございました。

＜次回「ウクライナ講座」のご案内＞



日時：10月16日（土）13：30～16：30
場所：名古屋市中区 栄YWCA（105号室）
内容：ウクライナ訪問報告会…
　　9月10日に帰国した訪問団が、
　　“新鮮な現地情報”をお話しします。
　　茶話会＆ウクライナ民芸品の販売
　　クリスマスカード作り…
　　ウクライナの子ども達に“クリスマスカード”を贈りましょう。切り貼り・色づけなどをして、楽しいカードを作りましょう！

奨学金事業の報告（田中良明）

＜2004年度の新規奨学生の採用枠決定＞

ホステージ基金と協議の結果、2004年度新規奨学生の学校別の採用数が、「教育大４名；医学専門学校５名；農業生態大学５名」に決まりました。03年度比で、教育大▲１名，農業生態大学＋１名です。教育大４名のうち１名はすでに決定していて、障害者団体リクヴィダートルのメンバー（したがって、事故処理作業者で障害者）の子どもさんです。

このほかに、医科大学進学者が現れれば、２名まで無条件で採用されます。

＜卒業生の進路＞

この春までに卒業した奨学生の総数は、42名になりました。内訳は、「医学専門学校28名；教育大１０名；農業生態大学４名」です。医学専門学校卒業生のうち、20名の進路が判明しています。16名がジトーミル州内の医療機関で働き、３名が進学（うち２名は医科大学）、１名がウクライナ軍です。最後の１名は、兵役に就いているということでしょうか。

このほかに、研修費用を支援したウラディーミル・アルチュフ氏（訪日したアルチュフ医師の子）が、オブラスト成人病院で働いていることも判明しました。

＜これからの奨学金事業＞

開始時の取り決めで、「05年度まで新規採用を行い、資金に余裕があればさらに継続することがありうる」ことになっています。予想以上に寄付があったことにより、現時点では、さらに１年延長することが可能な状態です。これから、ホステージ基金と話し合いを進めていきます。

Ｔさんは、数年前から奨学生達へ個人的に支援を続けておられます。（ポレーシェ58号参照）
今回のインタビューでも、真摯な奨学生への思いを伺うことができました。

【奨学生のあしながおじさん・Ｔさんのお話】

・・・自分は戦争中、中学２年の時から学徒動員でかりだされ、15才で終戦を迎えて帰ってからは、勉強をする気にはなれず、やんちゃもやったし、ぶらぶらしていました。一匹狼で仕事をして、家庭を持ち子どもができたとき、自分が勉強してこなかった事が悔やまれました。自分の娘には教育を受けさせました。教育が一番大切だと思っています。原爆で被曝しながらも一生懸命勉強して、この国を作ってきた人達を見てきました。教育が国の根本だと思います。「チェルノブイリ」は、自分らにとっての「広島・長崎」と繋がり、「日本の終戦」は、「ソ連邦崩壊」と繋がります。

ウクライナの奨学生の支援は、被曝して病気になりながらも「勉強したい」と思っている若者達に、なんとか幸せになってほしいと思うからです。そのお金は、どぶに捨てるお金とは違う。

病気の学生のことが、とても気になります。その学生達の薬代にでもなればと思い、支援を続けています。穏やかでやさしく、人に親切な人になってほしい。

2006年のスタディー・ツアーには、是非参加したいと思っています。戦争体験以来、外国には行くまいと思っていましたが、遠くに住む「子ども」や「孫」（学生結婚している奨学生の子どもの事）に、是非会いたい。送られてくる写真や手紙を読むと、本当にかわいい。74歳だが、タバコも止め、コーヒーも減らし、体調整えて、なんとかウクライナに行き、「子ども」や「孫」に本当に会いたいんです。

結婚している学生には、子どもを大事にしてほしいと思う。大人によって、子どもは良くも悪くもなる。子どもを大切にし、家族を大切にする事が、ひいては国を良くすることだから。孫はもっと増えてもいいな。

結婚した学生に、「早く子どもができないかなぁ」と思ってしまいます。（談）

2004年 9月 ウクライナ訪問団 報告

〈左から 野崎父子、チュマク氏、市原、戸村、河田〉

9月1日から10日まで、ジトーミル州の移住者村の診療所などを訪れてきました。

今回の訪問は、まず最初に、**『チェルノブイリ母子支援募金(カタログハウス)』**からの助成金により購入された医薬品が、ナロジチ地区病院、ブルシロフ地区病院に無事届いているかを確認することです。

次に、外務省「草の根無償支援プログラム」の交付金による**『移住者村の診療所支援プロジェクト』**で、配備された医療機器などが届いているかを見届けることが主目的でした。5つの診療所の状況を見て、その効果・使用状況の報告等、医療関係者の声を直に聞いてくることです。さらに、次年度の草の根無償支援への申請に関して、申請希望が出されている病院・被災者団体の申請内容について、意見交換・申請の調整などを**『ホステージ基金』**と話し合ってくることでした。

今回の訪問団メンバーは、元事務局長の河田昌東さん、運営委員の市原佳代さんと私（戸村）、そして5月のプロジェクト評価研修会でアドバイザーを担当された日本福祉大の野崎泰志さんと、筑波大学生の野崎隆人さんの5人でした。チェル救の3人は3年ぶり、野崎さん父子はウクライナ初訪問です。（市原さんと野崎さん父子の3人は、私費参加で代表団のサポートをしていただきました。）

事前に、地区病院への医薬品購入（カタログハウス分）は完了していて、チェルノブイリ母子支援募金への報告用に、受け渡しのセレモニーと写真撮影をしました。ナロジチ病院・ブルシロフ病院の医薬品の棚がいっぱいになっているのを見て、私たちもうれしくなり、またエネルギッシュなテプリツキー・ナロジチ病院長を心強く感じました。

移住者村診療所でも、各所でうれしい歓迎を受けながら、真新しい歯科治療台・電磁波治療器・滅菌器などが据え付けられているのを、確認することができました。すでに、新しい機器を使って診療が行なわれているとのことでしたが、村の人たちは、私たちの訪問に遠慮してか、合間を見て受診されていたようで、残念ながら患者さんたちと話すことはできませんでした。予算不足の村の診療所に於いて、被災者により直接役立つ支援が行なわれることと思います。

この「草の根無償支援プログラム」は、「救援・中部が協力して、ホステージ基金が申請したもの」と、ブルシロフ病院のように「現地の組織が独自に申請したもの」があり、「今後の申請においては、独自に行なえないところを中心にサポートする」ことなどをホステージ基金と話し合いました。州立小児病院・市立小児病院・デニシサナトリウム・「チェルノブイリの消防士たち」基金・障害者協会・リクビダートルなどの被災者団体からの申請は、今後、調整をしながら日本大使館へ申請されると思われます。

〈ナロジチ病院にて〉

同行された野崎さんは、プロジェクト評価の専門家の目で、私たちと現地カウンターパート「ホステージ基金」の活動を視察され、この後計画している「移住者村診療所支援プログラム」の、活動評価実施に、協力していただけることになりました。　（戸村京子）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

３度目にして、初めて代表団として訪問しました。「その他大勢」では済まされない責任を少し感じつつ、今回もご多分にもれず、胃も心も充分満たされて来ました。

〈現地支援団体との会議風景〉

今回の訪問の目的の一つは、２年越しのプロジェクト、「外務省草の根支援プロジェクト（移住者村の診療所整備）」の機器配置の確認です。９月初めには、各診療所に機器が搬入されており、私たちは、27ヵ所のうち４ヵ所を訪れ、真新しい機器を確認することができました。もっと沢山の診療所を回りたかったのですが、なんせ広範囲にわたるプロジェクトゆえ、それは時間が許してくれませんでした。

４ヵ所の訪問先で、２人のナロジチ出身の医師に出会いました。モロゾフカ村診療所の初老の歯科医で元ナロジチ住人の『ウラジミール・ペトローヴィチ』さんは、新しい歯科診療台を私たちに紹介しながら、「この年になって、初めてこんな立派な機械で治療することができるなんて…」と、今までの苦渋の人生を笑みににじませながら、私たちに語ってくれました。

ラザリフカ村の准医師『タマーラ・コミナール』さんは、思春期にナロジチでチェルノブイリ事故を体験、移住を余儀なくされました。しかし暗さはみじんもなく、３日前に届いたばかりの往診鞄に、さっそくアンプルなどを詰め込み、私たちに担いで見せてくれる様子は、まるで新入学を迎えた少女のような愛らしさでした。

私たち日本人が、当たり前のように治療する虫歯も風邪も、移住者村では深刻な病気です。診療所には、老朽化して役に立たない機械や設備しかなく、あるのはスタッフたちの誠意と熱意のみ。地区病院まで足を運ぶには、時間もお金もかかる。そんな村の人々に、ほんの少しでも安心を感じてもらうためのプロジェクトだったことを、改めて…いえ、もしかして初めて気づかされた思いでした。

〈タマーラ・コミナールさん
（ラザリフカ村診療所）〉

移住者村での生活は、例外なく苦しいようです。特に産業もなく、自給自足で自分に頼るしかない生活は、まず健康でなければならないのに、それがとても難しい。しかし、村の診療所が質素ながらも、村人の病気の予防を担う体制が整えば、きっと彼らの生活に光が射すのではないでしょうか。

北部の大地の荒廃、増え続けている消防署の死亡者の名前を刻んだプレート。チェルノブイリは“ｉｎｇ”なのです。それならば、私たちの支援は、継続プラス発展を試みなければなりません。このプロジェクトはその記念すべき第一歩なのです。　（市原佳代）

チェルノブイリ原発事故被災地を訪ねて

（特活）名古屋NGOセンター理事
日本福祉大学福祉経営学部　助教授　野崎泰志

「息子を連れて行こう」とまず思った。「広島は修学旅行で行ったから、長崎にも行きたい」と言って、彼は高校を出る春に独りで九州一周の旅に出た。私の父は、広島で被爆した。そのこともあったのであろう。「ウクライナに行かないか？」と誘ったら、二つ返事で「授業をさぼって行く」と言う。今、大学二年の日本の平凡な若者が、何をウクライナから持って帰るのか、その方が、私自身の関心やこの会との今後の関わりよりも、ひょっとして遥かに大きな出来事となるかも知れない。そう思ったのである。

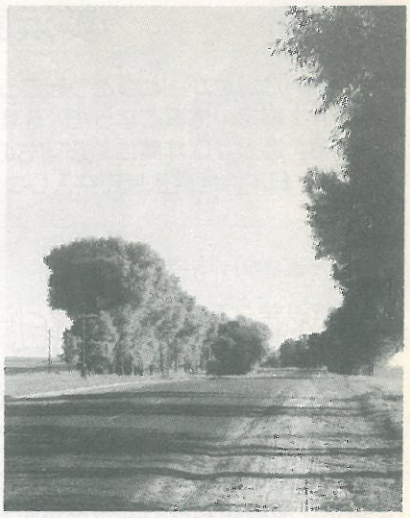
今年の五月に、名古屋ＮＧＯセンターとして「評価セミナー」を一泊二日で行った。アーユスとJICA中部から助成を得てのことで、そこに「ケーススタディの俎上に乗る」と手を挙げたのが、「チェルノブイリ救援・中部」であった。白熱の論議があった。その時に、うっすらと「現地に行ってみたい」という気持ちが芽生え、暑い夏のあいだに心が決まった。

私の目的は、「事業や組織の評価が可能な環境にあるかどうか」を確かめることだった。「ヒョウカ」と云う日本語の語感の悪さが、得てして人々を構えさせる。「どんな恐い先生だろう」と市原さんは思ったらしい。やった仕事を振り返り、将来を見通し、そして再びスクラムを組む、と云う一連の学びの作法の一つなのだが、信条や理念への介入だと、とりわけNGO界では疎まれ、為に「NGO評価」などと云う、だいそれたことを専門にするなどと言えば、狂気の沙汰である。「NGOの運営の細部に渡って洞察できるほどの経験を積んだ者が少ない」と云う事情もある。理論だけでは、NGOは歯が立たないのである。狂気の沙汰を受け入れるだけのものを見た。キリチャンスキーさんらの「ホステージ基金」の組織力は、並みのものではなかった。「地図の読めない女（戸村さん）と話を聞かない男（河田さん）」に、ウィーンで１時間ほど引き回されたが、結局は目的地に着いた。「ああ、この会はこうやって歩いて来たんだな」と、妙に評価してしまった。中間組織としての「ホステージ基金」と、そこにつながる幾つもの団体や病院などとの連携が、見える形で立ち上がって来たのが、今回の「診療所支援プロジェクト」だと思う。そこには、プログラムとして、緊急救援から保健・教育・社会リハビリ・心の支援まで、見事なまでの広かりが、時間と共に展開されて来た。キエフの日本大使館で、ジトミール州での草の根無償に関するアドバイスを今後とも求められたが、それはこの会の成熟の一つの頂点と言っていい。現地で政策評価を行える段階に到達したＮＧＯはほとんどない。

息子は、ジトミール消防署での最後のテーブルスピーチで、「本当は外国であればどこでも良かった」と白状した。ベトナム・カンボジアへの独り旅から戻ったばかりでもあった。しかし、空港での最後のお別れの時に、「また来ます！」と竹内さんに言って、「来ると言ったね。」と念を押されていた。どうやら、あの謎の通訳にも好かれたようである。行かざるを得まい。広島の被爆三世は、今度は何を持って行き、何を持って帰るのだろうか。

〈ウィーン市内？番地〉

初めてのウクライナ



今回のウクライナ訪問によって、個人的に今後やらなくてはならないことが増えました。それが何であるかは結論です。結論を述べる前に、そこに至ったいくつかの経緯を、洗い出さなくてはなりません。自己分析的に、順を追って見ていきましょう。

まず、**『ウクライナの美しい自然を見てしまった』**ことが挙げられます。ブルシーロフ地区の広大な農地を、延々と続くステップ地帯を、そしていたるところに（汚染地ナロジチにさえ）咲く花を、見てしまったことです。著者は、これにいたく感動したようです。また、あるウクライナ人女性が発した言葉が、著者の頭に張り付いて離れません。「信じられないような自然です。」

第二に、**『イキ（粋）な人たちに出逢ってしまった』**ことです。ここで言う「イキ」とは、ユーモアがあって、誠実で、勇敢な、というような意味です。こういった人々に出逢えたことは非常に幸運だという認識を、筆者は持っていると思われます。

〈プリバローチェ村診療所にて〉

第三は、**『他人のことを本気で心配できる人間に多く出逢った』**ことです。このことは、そんな人間存在するのか？という、ある種「哲学的（と少なくとも筆者は思っている）疑問」を、たまに考える筆者にとって、少なからぬ影響を与えたものと思われます。人は、遠く地球の反対側に生きる他人を想って、涙さえ流し得るのだと…。

第四は、**『今回の訪問が５名という団体旅行だった』**こと。筆者は、自分を除いた４名を尊敬し、感謝をしています。今回の訪問は、このメンバー以外ではあり得なかったと、勝手に思っているようです。しかし一方で、こちらが５人であるために、行く先々で、ウクライナの人々と接する時間は五分の一になります。しかも、筆者は代表団にくっついて行った専門家（＝いわばおまけ）のさらにその助手という立場。元来のシャイで引っ込み思案（？）という性格も災いして、発言が激減。行動も萎縮し、結果、上記三点の要素と積極的に接する機会を失してしまったのです。筆者は、このことを悔やんでいます。

以上四点の理由により、筆者はもう一度、今度は一人で、ウクライナを訪れなくてはいけなくなりました。加えるなら、この結論を、筆者は今回の訪問の後半には、既に認識していたようでした。最後の別れ際に発した「また来ます」との発言が、それを如実に表しています。さらに加えるなら、筆者の「また来ます」発言に対して、ある人が返した言葉「待ってますから」によって、筆者のウクライナ再訪は、義務化されました。そしてその人もまた、イキな人だと、筆者は思うのでありました。

（野崎隆人）

〈ナロジチ病院にて〉

連載41

美浜原発事故は最後の警告

恐れていたことが、とうとう起こった。8月9日の美浜3号の蒸気もれ事故は、5名の死亡者を出し、日本の原発史上最悪の惨事になった。5年前1999年9月の東海村JCO臨界事故でも、2名の死者を出したばかりである。過去10年間に、2回もの原発がらみの死亡事故は、世界でも例がない。技術大国とうぬぼれているうちに、日本は危険水域に突入しつつあるかもしれないのだ。美浜原発事故は、脱原発への最後の警告である。

原発と事故の特徴

美浜原発3号は、加圧水型と呼ばれ、アメリカのウェスチングハウス社が開発したもので、日本では三菱重工がもっぱら作っている。一言で言えば、原子力潜水艦の原子炉を陸にあげたタイプであり、狭い空間での放射能漏れから人間を守るために、放射能を含む一次冷却水を直接タービンに流さず、2次冷却水でタービンを回している。タービンを回したあとの蒸気は、復水器と呼ばれる装置により海水で冷やされ、再び戻っていくが、この時は140℃、10気圧もの高温高圧の熱水状態である。

今回の事故は、この配管が破れて熱水が高温の蒸気となって噴出し、作業員らを襲ったのである。ついでに言えば、同じ型の美浜2号は、「1991年に蒸気発生器のパイプが突然破断し、放射能を含む一次冷却水がもれて、緊急炉心冷却装置が作動する」というきわどい事故を起こしている。原発にとって、高温高圧の水や蒸気が流れる配管は、アキレス腱である。

事故原因　その1：三菱の設計ミス

直径56㎝、厚さ10㎜の配管が破れた原因は、長年の間に配管の壁が薄くなる「減肉」が起こり、高圧熱水に耐えられなかったからである。厚さ10㎜のはずのパイプは事故当時僅か0.6㎜しかなかったという。まるで、消防車のホースを紙筒で作ったような状態であり、破れるのは当然である。なぜ減肉が起こったのか？

破れた場所のすぐ上流に、熱水の流速を測る目的で測定器がとり付けられ、配管の直径が34cmに絞られていた。これにより、熱水の流れる配管の断面積は、急に半分以下になり、熱水の流速はこの部分で倍以上に早くなり、猛烈な渦巻きが発生する。この熱水の渦巻きや急流が、厚さ10㎜の炭素鋼の壁を削ったのである。こうした「配管の急激な絞り（オリフィス）」は、非常識な設計ミスである。かりに、アメリカの原設計図がそうであったとしても、無批判にコピーしたとすれば、三菱技術陣の常識を疑う。これほど直径を絞らずとも、流速は測れるはずである。

事故原因　その2：組織の無能と怠慢

減肉の起こりやすいこうした場所は、要注意個所として重点的な管理点検が必要だったが、三菱は1976年に建設後、23年間それを電力会社に通告しなかった。関西電力もそのことに気付かず、99年に通告を受けた下請け検査会社「日本アーム社」は、2003年11月になってやっと関電に通報したが、関電は「今年8月の定期点検時まで大丈夫」という根拠のない判断で、9ヵ月間放置した。

通産省は2000年に、関電の二次配管安全対策報告を「妥当」として、危険性を見逃した。1986年に、アメリカのサリー原発でほとんど同じ事故が起こり、4名が死亡した。にもかかわらず、関電や政府は、国内の同型原発の点検を行わず、アメリカの事故の教訓は生かされなかった。

その結果、運転開始以来28年間、一度も点検が行われない異常事態が生じた。こうした全ての組織の無能と怠慢が、今回の事故の真の原因である。

劣化する日本の技術？

事故後の調査で、新たに他の原発でも点検漏れが見つかり、17箇所にも上っている。これは、危機的状況である。三菱自動車の事故隠しや、ロケット打ち上げ失敗の例を引くまでもない。日本は、危険な状態に一歩一歩向かっているのではないか。何しろ、小学生の4割が天動説を信じる技術大国である。

（河田）

竹内さんのウクライナ便り

ウクライナでは、10月末に予定された大統領選挙を控え、計26名の立候補者が各地での選挙運動を繰り広げていますが、実質上は、現大統領クチマ氏の全面的バックアップを受けた「現首相のヤヌコーヴィチ候補」と、元国立銀行総裁・元首相で、現在「野党最大派閥のリーダーであるユシェンコ候補」の一騎打ち状態。しかし、共産党及び社会党の党首も立候補しており、ある程度の得票が見込まれるため、上記の2人のうちいずれかが、ただちに過半数の票を得ることはまずないとみられています。つまり、「第1次投票で1位と2位を占めた候補者の決選投票が11月にあるだろう」という見込み。街中で目立つのは、路傍に並ぶヤヌコーヴィチ氏の巨大な選挙宣伝看板で、彼自身の笑顔がついたもののほか、「私はヤヌコーヴィチを支持します」というシリーズがあり、アテネ・オリンピックで金メダルを得た水泳選手、クラフチュク前大統領などの著名人の他、医師とか技師とかいった、ちまたの人の写真も登場しています。新聞やTVでも、政府寄りのものはこぞって、ヤヌコーヴィチ氏の業績を誇示する報道に走り、他の候補は画面に出しても、ユシェンコ氏の選挙活動については、彼の選挙参謀しか出てこないのが常です。政府寄りでないTV局というのは、1チャンネルしかないというのが現状であり、それもケーブルTVでしか見られません。ユシェンコ氏のイメージを傷つける報道も次々になされており、ごく最近では、ユシェンコ氏を支持する野党リーダーの一人ティモシェンコ氏が、ロシアの検察庁から召喚を受けたというニュースがありましたが、「クチマーヤヌコーヴィチ体制」を明らかに支持している「ロシアのプーチン政権」が協力してのことではないかと、疑わせられます。ティモシェンコ氏は、数年前に野党が団結して行った「クチマ無しのウクライナを！」という抗議行動の旗頭の一人であり、「ヤヌコーヴィチが大統領になれば、彼の出身地であるドネツクの財閥の利権、また現政権周囲の政商の利権を守る政府ができるだけ。ウクライナ国民のための政府にはならない」と明言しており、彼女自身の政

見や金脈に疑問を持つ人にも、その現政権に対する一貫した批判の姿勢は、評価されています。一方、クチマ大統領は、8月23日、独立記念日前夜の集会で、自らの2期の任期を回顧しつつ、「『クチマ無しのウクライナ』は、永久にありえない」と発言して拍手を浴びましたが、解釈によっては大変不気味な文句です。世論調査によれば、ユシェンコ氏の人気が、ヤヌコーヴィチ氏をわずかにしのいでいるのですが、投票日が近づくにつれてその差が縮まってきているのは、ひょっとして最初からそのように操作された数字なのではないかと思ってしまいます。選挙には国際監視団が参加することになっており、野党は投票所での出口調査を行う予定ですが、すでに投票数のごまかしが懸念されています。私の若い友人たちは、どちらかというと非政治的な人も含め、ユシェンコを支持して(というより、ヤヌコーヴィチを大統領にさせてはならない、という意気込み)いますが、まがりなりにも続いている経済成長をテコに、政府は最低賃金や年金・奨学金の増額などを発表、小麦の豊作を理由にパンの価格も多少引き下げるなど、露骨な人気取りの施策を打ち出しています。「民主イニシアティヴ」基金と「社会調査」センターが、8月下旬に18歳以上の2,000人を対象に行った世論調査(「あなたの家計をどう評価しますか」)によれば、21%の人が「かつかつの暮らし、食費さえも不足している」という回答を選択。「食費は足りるが、服や靴を買うのは難しい」が38%、「生活はできるが、家具・TV・冷蔵庫などを買う(新調する)金はない」が36%で、これは、私の見聞にほぼあてはまる内容です。小さいとはいえ目の前のアメを選ぶか、不安を辞せず政財界の癒着と批判の押さえ込みに否をつきつけるか、国民の選択は？　(9月17日)

事務局便り

この夏チェル救は、久々に「夏祭り街頭イベント」に参加しました。「今池大バザール」。このイベントのボランティア募集をあちこちに流したら、元気のいい若者達が「ボランティアやります！」と参加してくれました。また、チェル救会計ＯＢ達や、毎度お馴染みの助っ人？達も駆け付けてくださり、嬉しい限りでした。事務所でのボランティアは、大変地味で面白みに欠けるのですが、このような街頭での活動は活気に満ち、元気がでるものです。ボランティアのひとりは、「普段、なかなか出会えないような人との交流もでき、とても楽しかった」と言っていました。「またこのような機会があったら、是非参加したい」と言って帰った学生さんもいたし、街頭で「チェルノブイリ」を語る機会を持てた今回のような企画には、今後も積極的に参加するようにしたいものだと思いました。「老齢化」に伴い、ついつい腰が重くなっていくことをしばし反省。何よりも私自身が久々に元気をもらい、気持ちのいい汗を流しました。

そして、秋。いよいよ恒例のミルク・カードキャンペーンが始まります。今年は、カードキャンペーンを北信濃のグループが担当してくださることとなり、また、ミルクキャンペーンは、今池大バザールで活躍した若いボランティアを中心に、展開していけそうです。なんだか、チェル救も活気が出てきました。（山盛）

現場に行こう!!

「なごやボランティアＮＰＯセンター」企画の「訪問ツアー」が、我が「ポレーシェ編集委員会」を直撃。９月25日（土）の午前・午後、２組に分かれて、総勢11名の若者達がやって来ました。

楽しいひととき (^-^)/ は、あっという間に過ぎ、版下の完成は深夜に(T_T)…。（J）

【訂正】先号(82号)P1の『キエフ市第1小児外来病院支援プロジェクト』は、『キエフ市デニャンスキー地区第1小児外来病院支援プロジェクト』の誤りでした。訂正いたします。

編集後記

☆「これは、何のご冗談でしょうか？」…代表団のマイクロバスが、交通検問で止められた時、ちょっとクールで渋い我等がドライバー・ニコライさんのセリフ。
（野崎さんへ…“地図が読めない戸村”ー「これは何のご冗談でしょうか？」）（京）

☆名古屋で21年ぶりの震度４。しかも２回も。緩みきった危機管理意識を巻き直す、千載一遇のチャンスだったのに、ウクライナ滞在中で体感できず、残念・・・は不謹慎？（佳）

☆朝から事務所に来訪者が11人！「阪神淡路大震災のボランティアも体験したの？」の質問に、「まだ、小学生でした。」とさりげなく。…応対した彼は、返す言葉が見つからなかった。（美）

☆定期点検は、『年１回（12ヵ月に１回）』のはずが、いつの間にか、『12ヵ月運転して、１ヵ月の点検（13カ月に１回）でOK』となった。配管の肉厚は、『検査結果が、規格の下限値を多少下回っても、切り上げでOK』…らしい。次の検査まで、開き直って運転するつもりだ。
『ジコチュー（自己中心的）』な解釈は、原発関係者のお家芸。事故にご注意！（J）

〒456−0022　名古屋市熱田区波寄町　20-14
印刷「エープリント」
TEL・FAX　(052) 871−9473